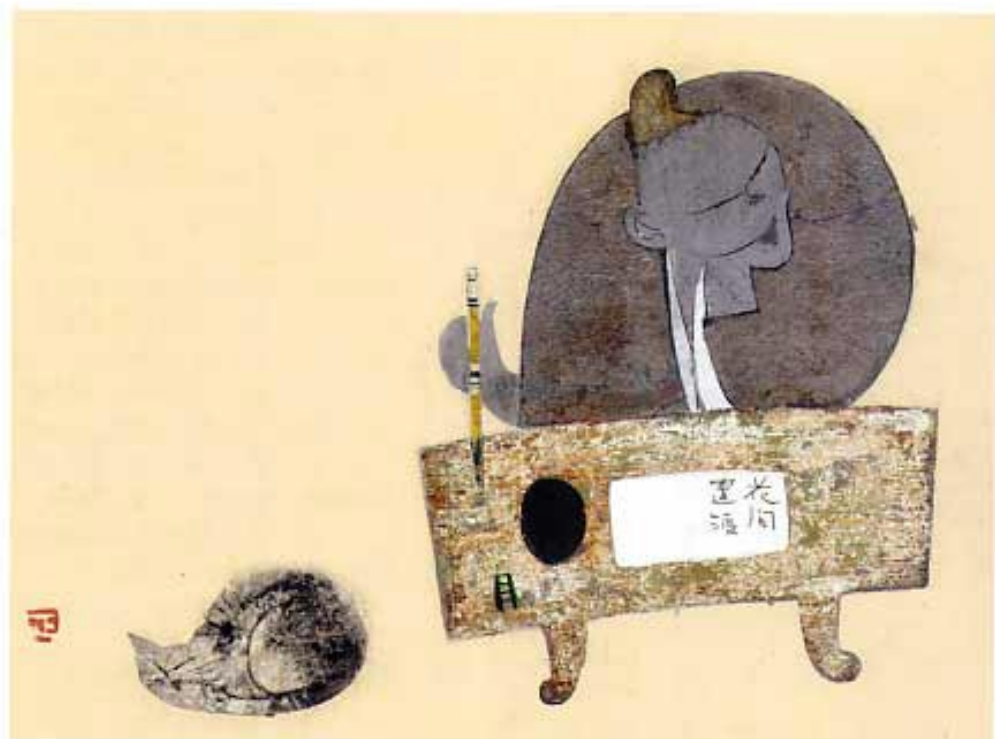


火星



平成20年4月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

鯉干す棚の光れる雛の日

桃の日の夕べ灯れる楮小屋

漢字の橋ひらかなの橋つちふれる

野遊の頭つむりに声のなく

杉苗の畑の上なる鳥の恋

さくらさくら後ろ歩きの子がまるぶ

ひばり野の光るものなる喉仏

卒業歌兎の耳の片折れに

天井の蓋うきあがる花の昼

春昼の正倉院の床の下

太白星

柳生千枝子

湯ざめして訃報の電話置きにけり
仏壇を閉ざす梅花の一輪と
霜の夜の足音のまた通り過ぐ
校庭の寒さの隅に遅刻の子
霜夜更け愛猫既に眠りをり
霜の夜の膝の仔猫は覚ますまじ
遅刻児の素早く外すマスクなど

杉浦典子

人形の頭干しある寒日和
凍星や足音に追ひつかれさう

大年の磨きし玻璃に月のぼる
鈴音の奥の明るし初神楽
初春の太閤の湯のあぶくかな
珈琲付き散歩にさそふ四日かな
雪晴や猪レースの猪運ばれ来

浜口高子

ゐのこづちまみれとなりぬ初詣
靖国の杜に焼芋屋のにほふ
風花の芯にゆるびのありにけり
雪暗や櫓お七がラジオより
拳玉のすたとんと坐る春の雪
寺柄杓のしぶき跳んだる雪兎
寒に入るうすくれなるの鴨の脛

火星作品

山尾玉藻選

初旅の鞆まつすぐ病室へ
耳さとき兄の枕辺賀状読む
病人の瞼すぐ閉づ七日粥
亡骸にささやきかける息白し
はらかなら尿の音す雪の通夜
松原の風ぶつかり来初電車
元日の狐の顔の日暮れたる
初夢の舳大きく曲りけり
長き橋短き橋と雪見舟
産み立ての卵の上を冬の虻
スキーバス行けど行けども星のなか
いつよりの東雜煮の二日かな
風紋の動き初めたる恵方かな

八幡丸山照子
明石戸栗末廣
宝塚山田美恵子

ギターの弦締める弛める花八ツ手
灯火の下にしばらく雪の傘
柚子風呂や子等を育てし乳房なり
ガレージに一人縄とび冬休
猟銃の鴨居に掛かる初あかり
鴨に囃され熟れし実万両
同窓の三婆仰ぐ冬桜
読経すぐ白息となる橋の上
大滝を遠見に手斧始かな
むらくもを上弦出でし小正月
梟に話しかける母の閨
凍土を掘る傍の一升瓶
井戸蓋の雪を払へり去年今年
うら畑に幼の尿る三日かな
雪見舟足をみぢかく座しぬたり
梟の貌たひらかなり雪が来る
凍蝶や大きなかほの飛鳥佛

八幡 波田美智子

大山文子

大和郡山 城 孝子

選のあとに

山尾 玉藻

昨年末から新年にかけて会員の幾人かが肉親を喪われたが、その作品は実に素晴らしかった。肉親を喪った悲しみが詠まれた作品を素晴らしきと言うのは不謹慎かも知れないが、それほど強くこころ打たれたのである。

私たち俳人が深い悲しみを負ったり窮地に立たされた場合、俳句をこころの抛り所とするのは当然のことであろう。しかし、「悲しい」「辛い」と直截的表現で自分のこころをいくら述べ募ってみても、読み手にはどうしても報告や感想ごととしか伝わらず、虚しさが残るばかりである。残念ながら、こころだけで成った俳句は弱い。

しかし、俳句がそのこころがものに至る表現体系をとった場合、実に大きな力を發揮する。ものの中にこそ一切の真理や本意が潜んでおり、それにぐっと迫り、求め、発見があれば、ものは必ず詩として昇華し、読み手のこころにひびく筈である。ものが見えて、それが自己（作者であり読者である）に深くとり付いたら、それこそが真のことなのである。真のこととはそれほどに畏敬すべきものであり、安易な報告や感想などのことからとは全く質を異にする。

亡骸にささやきかける息白し 丸山 照子
母逝けばふれ愛通り粉雪舞ふ 天谷 翔子

一句目、作者は新年に兄上を亡くされた。掲句より、亡骸

に囁かれた人物の様子や囁かれた内容を想像するのは、読み手として当然であろう。しかし、最もこころに焼き付くのは、やはり「息白し」であろう。ここの「息白し」とは、生ある証であると同時に、否応なく悲しみという現実在身をおかねばならない痛ましい証でもある。この「息白し」というものが、読み手の眼前に鮮烈に再現され、こころを擱んで離さない。これが真のことなのである。同時発表作へ初旅の鞆まつすぐ病室へへ病人の脛すく閉つ七日粥へはらからの尿の音す雪の通夜にも、刻々と深い悲しみにとらわれてゆく心情に誠があり、甚く感動する。当然のことながら「鞆まつすぐ病室へ」「病人の脛すく閉つ」「尿の音す」からもを通した真のことが伝わってくるからである。

二句目、この作者の母上も年末に急逝された。ご自身から人工呼吸器を拒否され、幸せな人生だったと別れの言葉を述べて逝かれたとお聞きし、深い感銘を受けた。一見、只ことの「ふれ愛通り粉雪舞ふ」は、母を喪った心境と関りないようにも見えるが、そうではない。故郷の実名の道路であろうの「ふれ愛通り」の愛の当て字が悲しくも床しく、作者もそこにこころ動かされたのである。この「ふれ愛」の愛は、故郷の風土や人々を愛し、愛され、満ち足りた思いで逝かれた母上への、作者の安寧の思いを象徴している愛なのである。「ふれ愛通り粉雪舞ふ」もまた真のことであつて、読み手のこころをじんわりと擱んで離さない。

同人 I

恒星圈

深澤 鱒

くわんおんに裏手ありけり羽子板市
城山にこころ放てば年立てり
初夢や壁を抜けたるあとさみし
恵方とてらくがき寺から男山
築ありし雪間に遊ぶ餅あはひ

波田美智子

堀 志 皋

初雀観音像の肩にゐる
買初はノート一冊頭痛薬
三日はや朝食パンに戻りけり
手袋を脱ぎ曾孫と手をつなぐ
鳩浮くを暫し待ちをり老夫婦

雪だるま携帯電話の壁紙に
降る雪や五又路信号機に停る
山刀を携へをりし牡丹鍋
水戸納豆呉れし長距離運転手
着ぶくれてプラットホームの喫煙所

廣畑 忠明

丸山 照子

初声や門かかる御輿倉
釣堀に音消えてゐる冬芽かな
雪山の遠く日当る城下町
隅々に日のゆきわたる鴨の陣
寒晴や税うたうのあがる町の音

海彦も山彦もゐる初景色
が兒童節の祝んばると兄のひと言初電話
初鏡兄を待たせてゐたりけり
加湿器に水満たしたり夜の雪
通夜の子の掌のあたたかき蒲団かな

獅子座

山尾玉藻推薦

奥田順子

かはせみに水の明るき寒の入
探梅や立入禁止とあるにはある
棟梁のまづ離れたる焚火かな
二の鳥居からはおぶはれ春著の子

藤田素子

冬晴やちんちん電車の極彩色
裸木に筋肉らしきものあり
振りむけば母が手を振る冬銀河
大寒の静かなりけり鴨の水

天谷翔子

骨壺に指輪沈めし片しぐれ
古暦母のしるしのありにけり
佗助や母亡き家の鍵ふたつ
風花や墓石の扉ずれてをり

西畑敦子

太鼓橋のぼつてきたる猿回し
猿曳の龍角散を飲みにけり
雪踏んでサーフボードを運びゆく
立山は父の山なり寒茜

白数康弘

飲食のあとは巻かれて花菟
男にもつめたき手あり遅桜
遠き世へ少年誘ふ桜かな
弁当を買ひに行きたる桜守

岩井ひろこ

濡れ縁の日の翳りきし龍の玉
バイオリンの弓を平らに冬薔薇
仕出し屋の来し能楽堂日脚伸ぶ
世直しの討論ばかりスイートピー

緒方佳子

座布団を横に飛ばせり春の寄席
砂吐かせ夫に効くべし寒蜆
たんと盛る白寿の椀の小豆粥
ぎやうさんの錠剤のみて寒明くる